

監査役会通信 (No.8)

取締役管理部長兼 CFO
林 毅俊

「経験」を補完するデータの活用

最近、インターネットが発達して様々な情報が容易に入手できるようになった。物事を検討する場合に、過去に実行した企業のデータを収集して検証してみると面白い結果が得られることがある。

私は、これまで長年に亘って上場バイオベンチャー企業でファイナンスを担当してきたが、資本政策の立案にあたっては、この手法がとても有効だった。投資家に対するディスクロージャーが進んでいる上場企業からは様々な情報を容易に収集することが可能である。例えば、資金調達や株式分割を検討する際には、過去に実施した企業のデータ（株価、資金調達額、投資家層別株主数・持株数、経営上のイベント等）が入手できる。これらのデータを時系列で分析することで、検討対象の施策を実施すべきステージか、又、実施した場合の成功のポイントを把握することができた。

さらに、外部機関が行った大規模データの分析が参考になる場合もある。若い頃に資本市場で勤務していた私にとっては、経営資源を集中して効率経営をする「選択と集中」こそが企業の採るべき道であり、「多角化」は株主価値を棄損すると思い込んでいたが、最近では企業の継続性やシーズの価値最大化のためには、「多角化」も必要ではないかと感じ始めていた。こうした疑問を持つ中で、昨年発行された証券アナリスト向け雑誌の中に興味深い論文を見つけた。この論文では、M&A を実行した株式上場企業データの統計解析を行い、積極的な「多角化」行動そのものが株主価値を棄損するものではないと結論付けたくえで、いわゆる「多角化ディスカウント」の存在は、長年に亘って積極的な戦略行動（M&A や事業売却）を取らなかった多角化企業が原因であるとしている。広範な事業分野への積極展開を図る当社にとって参考になる分析結果であった。

物事を検討する場合には、プラス面とマイナス面が思い浮かぶが、判断が難しい場合も多い。このような場合には、自分自身の経験や実際に経験した方のアドバイスが最も有用だと思う。これらの「経験」と比較すると詳細な定性情報は得にくいものの、上記のような企業データの分析は、対象サンプル数が多く結論を一般化しやすいこと、又、定量的な結論を得やすいという利点がある。今後も、「経験」を補完する情報として業務の意思決定に生かしていきたいと思う。

以上